



月歩学歩



「げっぼがっぼ」と読んで欲しいが、その意味は、“月日を歩き、学んで歩く”ということ？



特集

「わくわく体験研修 その1」

【両国の学生による日本の楽曲の演奏「ふるさと」の朗読と歌唱をした。主旨は、互いのふるさとを大事に思う気持ちを互いに見つめあう事であったが、スペインの聴衆の人々は東日本大震災での我々の痛みを同じように感じて下さったのか、会場は涙で溢れた。これは、音楽という芸術が、人々の心を揺らし、その揺らぎは、まるで、他者の心をどこまでも探す、思いやるやさしさの波と変わり、学生たちの朗読によることば(心)は、その波に運ばれ、スペインの人の心に運ばれたように思う。芸術交流という使命を果たした学生たちが、若き芸術家となってくれたことを確信する。】

(明石 現)

2-8P

その他の内容

キャンパス・ライフ

- ◆ 保育実習Ⅱ・Ⅲ (小久保 圭一郎) 9-13P

学生生活から

- ◆ サークル紹介 13-14P
- ◆ Tour de Chiba 2013 (鶴田 真二・1年生:大槻 洋平) 14-15P
- ◆ 「ほぼ56年会」から (福中 裕明) 16P

特集Ⅱ

- ◆ 「明德あそぼうカー」活動開始 (深谷 ベルタ) 17-19P
- ◆ 粘土くんと粘土ちゃんのお出かけ日記 その1 (深谷 ベルタ) 20-23P

特集 わくわく体験研修 その1

スペイン・子どもと芸術

明石 現



2013年9月13日に成田空港を出発した我々は、ドイツ・ミュンヘンを経由し、スペイン北部ビルバオ空港に到着した。そこには、私の古くからの友人でもあり、今回のツアーの受け入れの代表者となってくれたサンタンデル音楽院教授（ギタリスト）ハビエル・カンドウエラ氏を始め、その他関係者が出迎えてくれた。学生を其々のホストファミリーに送り届け、サンタンデルにおける翌日からの保育体験

他、芸術文化交流へと期待に胸を膨らませる。

言葉の壁がある初めてのスペインの家庭での生活に不安を感じていた学生も多かったが、スペインの方々の熱さ、明るさ、そして優しさに、彼らもすぐ打ち解け、先ずは、人と人との、新しくも素晴らしい出会いがここに生まれた。

8日間の滞在では、アルタミラの洞窟、ガウディ建築等、スペインの歴

史、芸術を学ぶテーマでの散策と、スペインの保育所を訪ねての保育体験、並びにサンタンデール音楽院との合同コンサートの製作と、忙しくも充実した日々の連続であった。何より、学生の顔が一日一日、生き生きと輝きを増してくれた事がうれしかった。この国の熱さを学生たちは、肌で感じてくれたと思う。ホストファミリーとの、涙が止まらない程泣いた別れは、せつなくもしかし学生の心にどれほどのものを与えてくれたのか...と、スペインのご協力者に対し感謝の念に堪えない。

最後に、取り分け私の立場として殊にレポートしたいことは、最終日に催した、両国の学生たちと我々講師（演奏家）による、音楽と朗読のコンサートである。最初に、私の書いた主旨をスペイン語で、カンドゥエラ氏が読み上げ、そして、両国の学生による日本の楽曲の演奏、日本のうた「ふるさと」の朗読と歌唱をした。最初に説明したコンサートの主旨は、互いのふるさとを大事に思う気持ちを互いに見つめあう事であったが、スペインの聴衆の人々は東日本大震災での我々の痛みを同じように感じて下さったのか、会場は涙で溢れた。これは、音楽という芸術

が、人々の心を揺らし、その揺らぎは、まるで、他者の心をどこまでも探す、思いやるやさしさの波と変わり、学生たちの朗読によることば(心)は、その波に運ばれ、スペインの人の心に運ばれたように思う。芸術交流という使命を果たした学生たちが、若き芸術家となってくれたことを確信する。

鈴木 裕花

1年生のころに先輩方のわくわく体験研修の発表を聞いてから、ずっと行くのを楽しみにしていました。色々な地域に訪問し、様々な体験をしてきた先輩方はとても楽しそうで充実した日々を送っていたのだと感じたのを覚えています。

全ての地域が魅力的で1か所に絞るのが大変でしたが、最終的にスペインに決めた理由は特になく、「行ってみたいな」と漠然とした気持ちでわくわく体験研修の日を迎えました。

一緒に行くメンバーの中には一度も話したことがない子がいて、引率をして下さった明石先生とは初対面。しかも8泊10日で滞在期間中は1人でホームステイをすることになり、スペインに行く明確な理由や目

的がなく、人見知りな私には不安の種がとて多く、スペイン語も英語も話せないのに楽しく過ごせるのか疑問に思っていました。

飛行機の中でスペイン語の挨拶程度を覚えてただけで現地に到着し、すぐに学生とは別れてホストファミリーの家に行きました。私のホストファミリーは教師のお父さんとお母さん、私と同年のお兄ちゃんと妹の4人家族で私を温かく迎えてくれました。

ですが、スペイン語も英語も話せない私とはもちろん会話が続きずとも気を遣わせてしまい、その日の夜からスペイン語の勉強を始めました。常に辞書とメモ帳を片手に行動し一生懸命相手の言葉を聞き取ってスペイン語で話をするように心掛けると、少しずつですが会話になりもっとコミュニケーションをとりたいたいという想いが強まっていきました。

日中は色々な場所に行って観光をしてスペインの文化を感じ、幼稚園に訪問した時には、日本の歌やスペインの歌を歌ったり体を動かして楽しんだり、とても貴重な時間を過ごしました。また、明石先生の友人のハビエルさんはサンタンデール音楽院の教授で、ホームステイ先を決めてくれたり幼稚園や観光等全て協力してく

れ、最終日の前日にはサンタンデール音楽院でコンサートを開いて下さりました。

音楽院の一室を借りて、「ソーラン節」「ふるさと」「君をのせて」を学生同士協力し合いながら、練習を筋肉痛になるまで行い、本番では立ち見客が出てくるほど沢山のお客さんが見に来て下さりました。とても緊張しましたが私たちなりに精一杯歌って踊り、ハビエルさんと明石先生のギター演奏も感動的でとても素敵なコンサートになり、夜にはお別れパーティーを開催してくれました。

毎日お世話になったホストファミリーやハビエルさんだけでなく、他の学生のホストファミリーやその友達、現地に住む日本人の方々や買い物をしたお店の店員さんまで、沢山の人の言葉がなくてもコミュニケーションをとって関わる事が出来、1秒も無駄な時間はなく全てが貴重な時間で忘れることのない宝物になりました。

全体を通してのテーマであった“音楽”について。コンサートの時しか音楽に関わることはないと思っていましたが、ふとハビエルさんに教えてもらった歌だったり手遊びを覚え、家に帰ってからホストファミリーに披露

すると嬉しそうにしてくれたり、ホストファミリーの兄妹がギターを弾きながら歌を歌ってくれたり、毎日の生活に音楽が溢れていることに気がつき、音楽の楽しさや素晴らしさなどをすごく感じ、異なる言語を使用していてもコミュニケーションはとれる事を改めて感じたたわくわく体験研修となりました。

現在もメールや手紙で連絡を取り合っており、彼らが日本に来る際は私たちがしてもらったように温かく迎えようと思っています。

小林 夢子

9月13日の朝・・・期待と不安が入り混じる不思議な感覚の中、冷静を装って空港に行きました。サンタンデルに着くとそれぞれのホストファミリーが待っていてくださり、飛行機の中で練習した自己紹介のスペイン語を絞り出すように伝えました。それからあっという間に時間が過ぎて行きました。落ち着く素敵な街並み、建物、料理、ショッピング、音楽院や幼稚園見学、コンサートなどたくさんの体験をして、たくさんのことを感じて・・・

その中でも特に、関わりの中で感じた温かさがとても印象に残っています。私たちのために時間をつくって案内をしてくださることは毎日で・・・

家に招待して下さり、ティータイムやディナーを楽しんだりもしました。毎日、行き帰りの時間も連絡を取り合って1人にならないような配慮をしていただけていました。言葉が通じないからとわからないままにするのではなく、お互いが理解できるまでどうにかして伝えたいという強い気持ちをジェスチャーに換えたり、本を見て単語だけで伝えるコミュニケーションにもどかしさもありましたが、伝わった時の感覚は毎回とても嬉しかったです。そして、なによりホストファミリーの「ゆうこがこんな言葉もスペイン語で言ってるよ(言えるようになったよ)」という驚いた顔を見るのがとても好きでした。

たくさんの素敵な関わりの中でも1番素敵だと感じたことは、初めて会った私を自然と輪の中に入れてくれるということです。

ホストファミリーの女の子と彼女の友達2人、いとこの女の子の5人でレストランに行き、食事をした日があります。「今日の夜ご飯は私の友達と一緒に食べましょう」と突然言われ、レストランの前で待ち合わせをして自己紹介をし、一緒に食事をしました。最初はドキドキが止まらず「私がいたら楽しめないだろうな」とか「絶対お邪魔だよ」と思っていました。しかし、

いざ席に座るとこの不安な気持ちを感じていることが面白いという不思議な感覚に変わっていきました。日本食レストランを選んでくれたことで、「これは日本にあるのか？」という話や箸の持ち方を一緒に練習したり、壁に掛けてあった舞妓さんの写真で盛り上がりました。食事が終わってさようならの時は寂しく、強くハグをしました。

これがもし日本だったら・・・友達と「〇日に食事をしましょう」と約束をしていた日にたまたまホームステイの子がいたとしたら、日本での私は友達との食事の約束を取り消すと思います。「ホームステイの子がいるなら私との約束はまた今度でいいよ」と遠慮するかもしれないし、立場が変わっても、「知らない子といきなり食事をするのは気を使わせてしまうかな？」と考えてしまうかもしれません。

また別の日には、一緒に街を案内してくれるということでホストファミリーの女の子と彼女の友達、3人で出か

けたこともありました。ここでも、初めて会った女の子の行動に驚きました。自己紹介をホストファミリーの家の玄関でしたので、私は勝手に、女の子は自分の家に帰るところなのだろうと思っていたら、ずっと一緒にいてくれて、わからない言葉があるとその言葉を繰り返して質問する私の癖を3人で笑いながら、「次はあの場所がいいんじゃない？」「写真撮ろうか？」と初めて会った私のためにたくさん考えてくれました。

「私は初めて会った人にここまで考えて行動できるだろうか？」と考えると同時に温かい気持ちでいっぱいになりました(他にもこのように感じる出来事がたくさんありました)。

日本に帰ってきてから、ホストファミリーのお父さんとのメールのやり取りの中でとても印象に残った嬉しい言葉があります。“Yuko=Sonrisa” “ゆうこ=笑顔”というとてもシンプルでスペイン語ができない私にもわかりやす



い一文です。スペインで素敵な人たちに出会えたことで自然と溢れてきた笑顔だと感じています。

スペインでの経験は私の頭の中を良い意味でかき混ぜてくれました。この出会い・経験を大切に自分自身と向き合い、これから進んでいきたい道を自分自身で決めていきたいです。

黒須 由莉子

今回のスペインへの旅は、私にとって初めての海外旅行となりました。

私がスペインを希望した理由は、もともとスペインサッカーが好きで、そこから国に対しても興味があり、日本の次に好きな国でした。初めて海外に行くなら絶対にスペインに行きたいと思っていたので、こんなに早く夢が叶うとは思っていませんでした。

初めての海外旅行は出発日が近づくに連れ、楽しみな気持ちより不安な気持ちの方が勝っていました。全日ホームステイということで、お世話になる

お家の方たちと上手くコミュニケーションがとれるかどうか、友達はできるかどうかなど、不安な気持ちが消えないまま、長い飛行機の時間も終わりあつという間にスペインに着いていました。

初日スペインに着いたのは夜中だったというのに、各家のホストファミリー皆さんで迎えに来てくださり、スペインの人々の優しさを感じました。行った時期が9月の前半だったので日本の気候に合わせたまま半袖一枚で着いたら、日本とは大違いの気候で震えが止まらないほど寒く、上着はトランクの中だし今取り出せる状況じゃないしどうしよう、と考えていると、隣にいた私ともう一人の明德学生がお世話になるお家のハビエルさんが、持っていた上着を私の肩に掛けてくれました。驚いて顔を見ると微笑んでくれていて、その時しっかりスペイン語でありがとうが言えたかどうかは覚えていません。

各ホストファミリーと学生がお家へ



帰って行き、私ともう一人の明德学生もお世話になるハビエルさんのお家に着くと、私たちにわかりやすいように英語で家の中の案内をしてくださいました。家の中には大きなグランドピアノがあり、ピアノの先生だということを知りました。

私たちが持っていた「指差しスペイン語」というガイドブック同様の「指差し日本語」というガイドブックをハビエルさんは持っていて、毎朝「おはよう」「いただきます」「ごちそうさまでした」「どういたしまして」などの日本語を覚えて一緒に言ってくれました。初日はスペイン語も英語もお互い伝わらなくて「どう伝えれば会話は成り立つか」を考え、スペインの旅行用ガイドブックで単語を覚え、次の日には単語単語の文章になってしまいましたが、その日に観光した場所、見たものなどを伝えることができ、お互い分かり合えた感動でとても笑顔になりました。

ハビエルさんが学長を務める音楽院に行った日は、最終日に発表するソーラン節と歌を練習しました。その練習中の時、初めて同い年くらいの女の子・男の子たちと交流があり、他の学生のホストファミリーということを知りました。最初の頃はどう話しかけたらいいかわからず、ホストファミリー

同士で仲がいいという感じでしたが、他のホストファミリーの女の子にフェスタ(パーティー)に連れていってもらい、初めて会った女の子の友達とも仲良くなれて、スペインで初めてお友達がたくさんできました。スペインで友達ができたらいいな、ととても憧れていたもので楽しい時間を過ごせて、誘ってもらえたことに感謝でいっぱいでした。

スペインの保育現場を見学に行き、言葉の通じない中で2・3歳の子ども達と関わることはできるのかと思っていましたが、子どもたちは日本人の私たちにも人見知りすることなく、膝の上に座ってきてくれたり保育者の見せた動物のパネルを見て「コネホ!(うさぎ)」「カバージョ!(馬)」と、パネルを指差ししながら私に教えてくれる子もいました。他の保育現場に行った時も同様で、どこに行くにも温かい歓迎をしていただき、スペインの人々も国ももっともっと好きになりました。

最終日はお別れがとても辛く、みんな泣いてばかりいましたがメールや手紙でまだまだ繋がっているのです。この関係を大切にしていきたいです。そして、初日に上着を貸してくれてありがとうと伝えたいと思います。

キャンパス・ライフ

保育実習Ⅱ・Ⅲ

小久保 圭一郎

保育実習Ⅱ・Ⅲは、2年間の集大成ともいえる実習である。本年度は例年以上に、これまで経験してきたすべての実習をつなげられるよう意識して事前事後指導を展開してきた。実習と実習とのつながりを意識することで、学生一人ひとりの「良さ」と「課題」が明確となり、それが就業につながると考えたからである。

今回、公立保育所の実習に入ったAさんの、実習事後に執筆した「学びのエピソード」を紹介する。

【「保育実習Ⅱ・Ⅲ」学びのエピソード】 (全文；部分改変)

今回の保育所実習で重点的にしていた目標は、子どもたちの様子を良く観るということです。ただ子どもたちとかわるだけではなく、様子を見守っていく中で、どうして今のような反応をしていたのか、もっとこの子のことをよく見ていきたい、かわっていききたいと思い、そこから自分はどうかか

わっていくのか、その子とのかかわりによって自分自身の考え方やかわり方にも変化が出てくるのではないかと思ったからです。

1日目の実習で3歳児クラスに入らせて頂き、子どもたちの遊びの中に入って子どもたちとかわったり、様子を見たりしていくうちに、K君という1人の男の子のことがとても気になりました。

K君と深くかわる前は、マイペースな男の子という印象でした。でも、いつも1人で遊んでいる様子が気になりK君とかわってみると、私の話している内容を聞くことが難しそうだったこと、他の周りの子どもたちに比べると話し方が少し幼いように感じたこと、友達の意見を聞くことが難しいのか、すぐもめてしまっている場面を何度か見かけること、そんな姿に気づくようになりました。

実習1日目では、K君のことを理解することが出来た訳ではありませんが、もしかしたらK君は特別な援助や

個別のかかわりが必要なお子さんではないか、と疑問を抱きました。

K君とミニカー遊びをしていた時に、ダンボールに描いてある道路や線路の絵を使ってバスを動かして遊んでいた。やがて、「電車、電車」と言ったりしている姿を見かけたので、箱の中にあつた緑のトーマスの列車を取り出して、ダンボールに描かれた線路の上に置いて「電車が通りまーす」と声を掛けてみました。すると、K君はとても嬉しそうににこにこした笑顔を見せて、列車を走らせて遊んでいました。保育者に度々名前を呼ばれたり、涙を流していたり、K君の気になる様子はたくさん見られましたが、列車で遊んでいるときに笑顔を見せたり、よく私のところに話をして来ていたりしていたことなど、素敵な一面を見ることも出来たので、K君のことをもっとよく知りたいと思うようになりました。

2日目は土曜日、日曜日の休みを挟んでの実習でした。自由遊びの時間、K君はミニカーとブロックを使って遊んでいました。するとK君のところへY君がやって来て、K君の使っていたミニカーを1つ取ってしまいました。私はY君に、「今はK君がそのミニカーを使っていたから、K君が使い終わ

ったら貸してもらおうよ」と伝えました。ですが、Y君はどうしてもそのミニカーで遊びたかったようで、なかなか受け入れてもらうことが出来ませんでした。私はK君に「ミニカー使い終わったらY君に貸してくれるかな」と聞いてみました。するとK君は使い終わる前に、そのミニカーを「いいよ」とY君に譲っていました。その後K君は他のミニカーを箱の中から取り出して遊び始めていました。私はそのK君の様子を見て、「K君、自分が遊んでいたミニカーをK君にどうぞって貸してあげられたんだね、すごいね」と声を掛けました。K君は褒められて嬉しかったのか、とても嬉しそうににこにこした笑顔で「うん」と答えていました。

しかし実習後、私が解決してしまうのではなく、Y君の貸してほしかった気持ちを受け止めて、「このミニカーが使いたかったんだよね、K君に貸してって聞いてみようか」とK君だけでなく、Y君の気持ちも認める対応をするべきだったのではないかと、反省しました。

その後もどう声掛けをすればK君に伝わるのだろうと考え、まず保育者のK君に対する声掛けの様子を参考にし

てみました。保育者はK君に声を掛けるとき、なるべく短い言葉でK君が理解出来るように伝えていきます。その保育者の声掛けを参考にして、「K君、〇〇します」などK君が理解出来るように、短い言葉で伝えるようにしました。すると、理解することが出来たのか、K君はすぐに気づいて行動していました。

また、2日目の実習では、A君という男の子のことも気になりました。私はK君とかかわりながらも、A君の様子を見ていました。友達とすれ違うときにたたいてしまったり、トイレに行くとき廊下で待っている近くの友達のことを蹴ってしまったり、時には「バカヤロー」とびっくりするような言葉を口にしたりするのです。今日のA君はどうしたんだろう、1日目はこんなことはなかったのにと驚きました。実習が終わった後、保育者にA君のことが気になったことを伝えてみました。すると保育者は、A君の家庭環境のこと、A君が友達とかかわりたいと思っても、普段のA君の様子を知っている子どもたちはA君とかかわろうとしないので、その友達の対応にA君が納得いかずに手を出してし

まうことで、A君と友達との喧嘩の悪循環であることをお聞きしました。そして、今日のA君の様子には保育者自身も驚いたこと、A君が満たさきれていないものを保育者が受け止めていくことが出来るようなかかわりをしていくことが必要であると、お話しして下さいました。

そのお話から、A君はとてもさみしい思いをしているのではないかと、1日目の時点でA君の様子に気づいていたら、A君の気持ちを受け止めたかかわりが出来たのではないかと、思います。

2日目の3歳児クラスの実習で、個別の配慮をすることの大切さ、1人ひとりに合った声掛けの仕方があることに改めて気づくことが出来ました。

また、子どもの状況を見て伝え方やかかわり方を工夫していくことも必要であること、A君のように気になる行動のある子どもには、抱えていることは何なのかと考え、受け止めていくことが大切であることを知り、私自身もたくさん気づくことができて、とても勉強になりました。

考察に若干の物足りなさがあるにせよ、一人の子どもについての詳細で具体的な姿が書かれており、エピソードとしては十分な内容である。それは一人ひとりの子どもをよく観るといふ、保育者にとって大切な資質のひとつを備えているということの証明でもある。実習に臨む姿勢には消極的な面もあるが、コツコツと努力を重ねていく学生であり、これから伸びる要素は十分持っていると思う。そうした背景から、保育実習Ⅱ・Ⅲを、保育実習Ⅰと同じ保育所で行なうこととした。

その甲斐あって保育実習Ⅱ・Ⅲでは、実習先の保育者から「実習記録に子どもの姿が詳細に書かれており、よく観察できていることがわかる」という評価を頂いた。

一方で、同じ保育者から別の評価も頂いた。

それは「今自分が何をすべきかを考えられていない。動けていない」という評価である。つまり、子どもを観るといふこと以外、保育者としての仕事できていない、という厳しい指摘である。

この評価は実習反省会でも指摘され

たとのことであるし、私も実習巡回訪問指導の際、Aさんに伝えた。その指摘を聞き、Aさんは涙を流していた。

しかしながら、その点について上記レポートではまったく触れられていない。

実習で最も印象に残ったことを書くこの「学びのエピソード」レポート、Aさんにとっては保育者からの厳しい指摘以上に、子どものことが印象に残ったのであろうか。それとも、自分のできていない部分をみたくなかったであろうか。

保育者の指摘をAさんは今、どのように感じているのか、私は知りたかった。

後日Aさんと面談し、2年次後期科目「保育・教職実践演習」において実習を振り返り、突きつけられた指摘について考察レポートを執筆することを、Aさんは約束した。

今の時期、2年生の多くは就職活動に焦っている。給与、採用人数、通勤時間、勤務時間等条件を比べながら就業していく様子は、さながらお見合いのようだ。それが良いとか悪いとか言いたいわけではない。そ

のように考えてするのも、就職活動のひとつのやり方だ。

しかし仕事の中身の濃さに比して給与が比較的高くないとされる保育の仕事。9時から5時まで勤務すればそれで良いという仕事ではない。家に帰ってからも、休日も子どものことを考える。それはつまり、子どもと、そして自分自身と常に向き合うということである。向き合うことに生きがいを見出さなければとても勤まるものではない。

向き合うことに生きがいを見出したいのなら、見たくない現実を見なければならぬ、深い傷を負う覚悟で子どもたちの前に立たなければならない、日々の生活の営みである保育に就業していくこと、すなわち、子どもと自分自身に向き合っていく仕事を選ぶとはそういうことだ。

保育者として就業していくため、Aさんが本当に子どもと自分自身に向き合うのは、まさにこれからである。

学生生活から

サークル紹介

今年度後期より活動を開始した新たなサークルを紹介します。

冒険パーク

部長：尾崎 莉奈

私たち冒険パークサークルは、毎月第4土曜日に行われる「おゆみ野カフェ」という子どもたちが遊ぶ場で、一緒に遊ぶスタッフをしています。規制はあまりありません。全て自分たちの責任で遊びます。子どもたちは全力で遊ぶので、私たちも全力でそれに応えます。

夏は水遊びが中心で、水鉄砲で水をかけあったり、バケツに水をためて追いかけてあつたりしました。時に白熱すぎて、スタッフ同士で戦い始めたりして、帰る頃には皆水びたしになりました。秋に入って涼しくなってくると、お月見団子の作成、宝探しをしました。今はちびっこ運動、鬼ごっこ、12月には逃走中ミニ（編注：テレビ番組「逃走中」を模したものを）を計画しています。寒くなってきましたが、「おゆみ野カフェ」には、外で元気に遊ぶ子

どもたちとスタッフの楽しそうな声が響いています。私たち冒険パークサークルは、「おゆみ野カフェ」だけでなく、いろいろな事に挑戦していきたいと思っています。興味を持った方は、ぜひ参加してみませんか。

フィットネスクラブ

部長：井上 和幸

我々フィットネスクラブは、主に体力の向上と体を引き締めることを目的として活動しています。自分自身の体を「痩せたいっ」「鍛えたいっ」という野望を持って来てもらっ

てもいいですし、実習や将来就職した時のことを考えて来てほしいです。

活動している日時は、学校のある日で放課後はほぼ毎日と、昼休みも放課後と同じくらいのペースで活動しています。放課後は18～19時くらいまで活動しています。黙々とトレーニングに打ち込んでいる訳ではなく、自分たちのペースで行い、話をしながら楽しく活動しています。遊びに来る感覚でも良いので、是非来てほしいと思います。

場所は駐輪場横の倉庫です。

Tour de Chiba 2013

10月12日 (Stage 1) ・ 13日 (Stage 2) ・ 14日 (Stage 3)

【参加者】 大槻洋平 (チャリサー1年) ・ 鶴田真二 (チャリサー顧問) * Stage 1 に参加

【走行距離】 約200 km

【一言】 「無謀だったけど、逆風にも負けずに走り切った200 km !

あ～走ったっ。」 (大槻)

「諦めることも諦めないことも難しかった。」 (鶴田)

【スタート】

8 : 00 富津市総合社会体育館

↓ 125 km

【ゴール】

16 : 00 成田市東和田駐車場

【エイドステーション (休憩所)】

- ・ 鎌足さくら公園 (27.7km地点)
- ・ 長柄町役場 (62.5km地点)
- ・ 八街市立二州小学校 (87.2km地点)
- ・ 芝山町立芝山小学校 (109.9km地点)

【スタート地点まで】

4 : 1 5 千葉明德短期大学正門 出発 (ここから始まり)

↓ 50 km

7 : 0 5 富津市総合社会体育館 到着 (向かい風がきつくこの時点で既にくたくた)

【ゴール地点から】

1 7 : 0 0 成田市東和田駐車場 出発 (さて帰ろうか)

↓ 30 km

1 8 : 4 5 千葉市中央区寒川町「笑がおの湯」(銭湯) 到着 (ここで終わり)



◀スタート! (富津市)

▶昼食: 八街リン輪弁当 (八街市立二州小学校)



◀ゴール!▶

(成田市)

▼やっと走り終わって「笑がおの湯」へ・・・汗を流してさっぱり! とにかく気持ち良かった!



教員生活から...

「ほぼ56年会」から

ふくなか ひろあき

千葉明德学園 法人事務局 理事長秘書 福中 裕明

法人事務局に今年の4月から勤務しております、福中裕明と申します。

先日「ほぼ56年会」なるものを開催しました。この会の説明やかかる経緯について順を追って書かせていただきます。

千葉明德学園は短期大学・中学校・高等学校・附属幼稚園・本八幡駅保育園・浜野駅保育園、さらに社会福祉法人千葉明德会土気保育園・そでの保育園、そして法人事務局といったさまざまな部門から構成されています。これらの部門が互いに触れ合う機会というのが少ないのです。私がいる中央区生実町のキャンパスと保育園4園とは敷地が離れており、なかなか顔を合わせる機会がないのですが、では同じ敷地内ならやりとりがあるかと言うと、これが意外とないのです。例えば、短期大学にはこんなイベントがある、高等学校にはこんな先生がいる、そんなことを互いがあまり知らないのです。

こうした経緯から互いを知る場が欲しいと考えるようになり、短期大学の伊藤恵里子先生・田中葵先生・鶴田真二先生のご協力の下、冒頭の

「ほぼ56年会」という、私と面識がある学園内の昭和56年生まれの方にお声かけをしてお声かけをしての部門横断型懇親会を開くことになりました。なぜ56年かと申しますと、私が56年生まれだということと、いきなり全ての方にお声かけするのも収集がつかなくなるかと考え、身近なところから進めていこうと考えたためです。

会はとても和やかに楽しく、無事に終わることが出来ました。普段違う職場で違う仕事をしている各人が、その共通項や相違点と向き合い、また人として向き合う。そんなプロセスの中に互いの組織・人の新しい可能性を模索していければ、と思っています。

こうした部門を超えて人が繋がる取組を、今後も広げていきたいと思っています。みなさま、ぜひともご協力ください。今年の短期大学学園祭のテーマでもあった「Ring of all みんなの輪」(*)を強く大きく広げていきましょう。

*編注：詳しくは『月歩学歩8-9月号』の特集「学園祭」をお読みください。



特集II 「明德あそぼうカー」活動開始

深谷 ベルタ



9月27日をもって本学で今年度から始まった新プロジェクト「明德あそぼうカー」が第一歩を踏み出したことをご報告します。

「明德あそぼうカー・プロジェクト」とは、保育者養成校である本学と保育現場とをつなぐツールの一つで、実習生を受け入れ、また卒業生に対して働く機会を与えている保育現場と多様な繋がりがあるなかで、これは新しい発想に基づくものです。ご承知の通り近年の保育者を取り巻く社会的状況は厳しく、多くの若い女性（保育者として実際に働く人の90%以上が女性）にとってやり甲斐と魅力が感じられる仕事ではあるが、責任と心身両面での負担が重い仕事で、現時点で女性がする仕事の中で最も待遇の悪い仕事になってしまいました。子どもたちや子育て家庭を巡る社会状況も、様々な支援策にも関わらず目立って改善されたように見えず、子育て支援の方策として、保育者に対する期待と仕事の負担が増すばかりで、それが保育者

個々人に重くのしかかり、結果的に高い離職率につながって行きます。子どもたちのよりよい育ちを考え、保育内容をより豊かにしたいと思っても、日々遅い時間まで仕事をしていると、新しいことを学ぶために外に出ることは時間的に難しかったり、また近くにそのような場所が無かったりします。日々の保育をこなすだけで精いっぱい、心身の疲れを癒す、あるいはストレスを解消することで精いっぱいの人も大勢います。他にも色々な要因がありますが、全般的に見ると、今ゆったりしていて、ゆとりのある保育現場は、30数年前に比べると少なくなったと言われています。

保育者を養成する学校としてこの現状をある程度把握していて、実習生をお願いすることや、本学の教育実践への協力や参加をお願いする、あるいは卒業生のその後をフォローしていただくだけではなく、何らかの形で他の繋がり、しかもお互いにメリットになるような繋がりを模索していました。養成校の教員の中に積極的に園内研修をしたり、巡回相談員を引き受けたりすることは、既にさ

れている支援方法のひとつですし、多くの場合その効果も出ていると思います。でも、仕事が終わってからの研修は、保育者の目から見るとプラスの負担。問題解決への糸口になることは多くあるとしても、残業や休日出勤になり、そう言ったことはやはり負担です。報告者である私は長年保育者として現場で働いてきたので、こう言った研修の良さを認めつつも、仕事が終わってからの支援は始めから考えていませんでした。できれば、保育者が働いている時間帯に、そして子どもたちと一緒に参加できる方法を見つけたいと思っておりました。

2012年度に、たまたま本学附属幼稚園の保育内容を大きく見直す動きが本格的に開始されたなかで、私も造形プログラムに参加できる機会をいただき、短大の倉庫にずっと眠っていた土粘土を取り出してみ、6回にわたり4-5歳の子どもたちと粘土遊びを楽しむことができ、幼児期にこのような体験ができることの面白さや、この種の遊びから引き出せる体験の大事さに改めて気付かされました。私自身は保育現場に初めて入った時期（今から約30年前）まで、多くの保育現場で土粘土遊びもされていたようですが、それが、い

ろいろな理由で徐々に姿を消してしまったことに、寂しい思いというか、惜しいという気持ちをもっており、何らかの方法で復活させることはできないかと考えていました。造形活動と聞いてすぐさま作品を連想させる方も多いと思いますが、結果的に何かの作品が残されるとしても、幼児期の造形活動の真の目的は全く別のところにあることを、私自身も、ときには短大の学生たちと一緒に尋ねて行った横浜美術館の子どもアトリエで学ぶ機会にも恵まれていました。

簡単ではありますが、「明德あそぼうカー」のアイデアが生まれたのはこのような発想からです。両手いっぱい保育者にとって新たな負担となるようなことをお願いすることはできません。わずかな力にしかかなれないことを自覚しつつ、少しでもその負担を軽減し、短大の教員だからこそ得意とすること（あるいはできることと言ってもいいのですが）で、子どもたちが活動している時間に現場に出かけていき、そこで普段はなかなかできないような事を一緒に楽しむ。養成校にはいろいろな専門領域の教員がいます。学生達もいます。明德短大にたまたま大量の土粘土も、昔ここで働いていた教

員たちのおかげで残されていました。唯一なかったものは、その粘土を乗せて、実際に保育現場まで運ぶための「足」でした。今年の春にこのプロジェクトを立ち上げて、土粘土を一度に50人位の子どもが遊べる量に増やしていただき、更に8月末に中古車も購入していただきました。愛らしいデザインで昔から好かれている古いワーゲンのワゴン車で、一度に300キロの粘土を積み込むことができます。初出動も急に決り、10月の現在まで既に4回保育現場に出かけ、200人位の子どもたちにダイナミックな土粘土遊びを体験していただきました。

現場で保育者に負担をかけないため、更に学生にとっても貴重な学びの体験となるため、カリキュラムの構成上実際に動ける2年生に参加していただいています。長期的な展望として、できれば単発のイベント的な利用ではなく、年間の保育プログラムの中に組み込んで、継続的な利用を考えておりますが、年度途中のスタートという事情もあるため、プログラムの良さを理解しても、急に対応できない保育現場もあると思います。そこで臨機応変に保育現場の事情と、短大教員との時間調整を工夫し、また土粘土のプログラムだけ

ではなく、他の遊びプログラム“積み込んで”、短大から可能な現場支援方法を考えて行きたい。保育者養成校と保育現場とは上下関係ではなく、お互いに相互依存関係で、片一方が成り立たなくなると、もう片方も大きなダメージを受けます。また、何らかの方法で保育者の仕事の負担軽減ができなければ、いくらやり甲斐のある素敵な仕事だとは言っても、成り手不足や保育者の流出を止められません。保育現場や保育者に対して際限なく期待値をあげても、具体的なサポートや支援方法がないと、押し付け感やストレスだけ増しますが、お互いに元気になることはできないだろうと思います。保育者養成校は保育者の社会的評価や待遇面での改善はできませんが、養成校なりの資源があり、それを提供することで保育現場にもいくらかのサポートができれば、それを利用することに越したことはありません。しかし、相互依存関係にある者たちであるのに、片方だけが“いい思い”をするのはだめです。お互いにメリットになるような関係を築くつながりを、私達がこの「明德あそぼうカー・プロジェクト」で今後も開拓して行きたい。ご支援、ご理解に感謝しつつ。

粘土くんと粘土ちゃんのお出かけ日記 その1

深谷 ベルタ



「『月歩学歩』に初めて登場します。名前は「粘土くん」と言います。僕に双子のお姉さんがいます。「粘土ちゃん」です。（粘土ですから、「ねえちゃん」とも呼ばれることがあります。）双子ですから大きさも顔もそっくりです。私達2人、たくさんの友達を連れてこれから色々な保育園や幼稚園等に遊びに出掛けて行きます。よろしくお願ひします。」

粘土くんと粘土ちゃんは、明德短期大学の新しいキャラクターです。柔らかい土粘土でできています。2人の健康管理等、もろもろのお世話が深谷先生の仕事です。2人のお母さんは小柄だったので、この2人も小さいのです。体重は2.5キロ位で、2人を合わせるとぴったりの5キロです。この2人が生まれたのは9月26日の午後7時頃。

2人とも小さい子どもなので、一人では歩けません。でも、出掛けたがっています。出掛けるときに車にのって出掛けます。千葉県はとても広いですから。車は「明德あそぼうカー」と言います。「あそぼうっ

か〜」でもよかったけど。古いフォルクスワーゲンのワゴン車で、Type 2ですから、愛称は「ツー」です。「ツー」を見つけてくれたのは事務職員の得重さんです。目を皿にして探してくれました。「ツー」は車にしては大変なお爺さんです。でも、心臓はとても丈夫です。心臓よりも素敵なのはその優しい丸顔です。最近の車は皆怒りっぽくて、子どもを見ても大人を見ても常に目がつり上がっていて、怒った顔をしています。でも、「ツー」は違います。なぜかって、「ツー」は子どものことも大人のことも、この世にいることも大好きだからです。「ツー」はお爺さん車ですから運転は少し難しいですよ。ところどころ錆びています。お年寄ですから、当然ですね。傷ついているところもあります。でも、心臓は丈夫です。何だか人みたいですね。粘土くんと粘土ちゃんは、たくさんの粘土仲間と一緒に出掛けるときは、この車にのって行きます。



さて、「粘土くん」と「粘土ちゃん」、初めてお出かけしたのは生まれた次の日の9月27日です。なぜこんなに早く出掛けることになったかというと、茨城県牛久市という町の「奥野さくらふれあい保育園」で、この2人と遊べることを30人の子どもたちが楽しみにして、首を長くして待っていたからなのです。子どもをあまり待たせてしまうと、どんどん首が伸びるでしょう。しまいにはキリンになってしまったら私達も困るので、早く出掛けることにしました。「ツー」の新しい服がまだ全然できていなくて、小さいハンカチみたいなパンツしか着ていなかったけれど、それでも行くことにしました。

「ツー」を保育園まで運転してくれたのは鶴田先生です。とても早起きして。「ツー」はお爺さんですからカーナビもついていません。そのようなお爺さんと遠い町まで一緒に出掛けるのは初めてだったので、少しばかり不安でした。不安ですと、鶴田先生も運転に集中できませんから、田中先生も駆けつけてくれました。そして、カーナビになってくれました。人間ってすごいですね。それに素敵なカーナビでしょう。他の車もそのようなカーナビが欲しいと

思いますよ。でも、残念です。このようなカーナビを売っていませんから、買えません。

9月27日（金）は、この夏の最高に美しい晴日でした。真っ青の空、白い羊雲、青々とした山道、気持ちいい風。

保育園で待っていた子どもたちが大喜びして粘土くんたちと遊んでくれました。先生達も皆一緒に遊びました。

粘土くんと粘土ちゃんが一番好きな遊びは「変身ごっこ」です。ですから、色々な形に変身して遊びました。2時間位たっぷり遊びました。丸くなったり、四角くなったり、伸びたり縮んだり、太ったり痩せたり、もう思いつく限りの遊びをしました。本当はもっと遊びたかったけれど、小さい粘土たちは疲れて、眠くなりました。それで小さく白いベッドに入りました。少しグレイ色になった大きなシートを子どもたちがまた真っ白にしてくれました。それから私達全員（全員ですよ！つまり先生や学生全員）に子どもたちと先生達で作ったプレゼントを渡してくれて、しかもお昼ご飯までご馳走してくれました。園長先生は学生達を最寄り駅まで送ってくれました。学生達と別れてから、粘土

くんと粘土ちゃんは「あそぼうカー」に乗って、学校に帰ってきました。2時間遊んで6時間も車に乗っていたので、それは疲れるでしょう。おまけに帰り道の太陽はエンジン全開のようなかんかん照りで、もち肌の田中先生が危うく磯部焼になりそうになりました。でも、大丈夫。帰り道は鶴田先生も「ツー」の運転をマスターし、大きくて長いトラックを見つけて、その影に隠れて走ってくれました。

ところが、最初のお出かけから学校に帰ったそのとき、「うちの幼稚園にも遊びに来て」という電話がなりました。

「もしもし。こちらは暁星国際新浦安幼稚園です。粘土君と粘土ちゃんをうちにも連れてきて下さい。」しかも、3回も、です。「粘土くんと粘土ちゃん」、そこも行きたいと言うので、次の週も出掛けることにしました。今度はそれほど遠いところではありませんでした。そこで、150人の子どもたちと、たくさんの先生と

遊ぶことになりました。

暁星国際新浦安幼稚園は新浦安にあります。最寄り駅も新浦安です。10年前にできた新しい幼稚園で、新しい保育に挑戦しています。保育園に遊びに行ったときも、幼稚園のときも、学生達と一緒に来てくれました。「あそぼうカー」に乗れるのは粘土くんと粘土ちゃんたちと先生たちだけで、それで500キロでしょう？もう学生が乗れる場所がありません。ですから、学生達は電車です。毎回3人ずつ来てくれました。学生達も一緒に来てくれると、皆一緒に遊ぶことができますし、“いいこと”が増えます。粘土の子どもたちも、人間の子どもたちも、先生達も、学生達も一緒に喜ぶことができます。3人か4人まではね。

幼稚園に行くときは明石先生が運転してくれて、カーナビは柴田先生になりました。福中ジュニアのヒーローさん（福中裕明）も来てくれた日があります。幼稚園に着いてまず驚いたのは、たくさんの外国人先生



がいることでした。皆英語で話す先生で、英語のできない粘土くんと粘土ちゃん、目を丸くしていました。で、布の下に隠れて、子どもたちが来るのを待っていました。子どもたち50人がやってきて、挨拶して、少し話もできるのを待って、やっと布から顔を出しました。すると今度は子どもたちがびっくりして目を丸くしました。「わ〜っ！こんなものを見たのは生まれて初めてだよ」と言わんばかりに。でも、逃げなかったのですよ。ここでも、もちろん、たくさん遊びましたよ。5人も登れるような大きな山になったり、本物のウェディングケーキそっくりに化けたり、アオダイショウ10匹よりも長いヘビになったり、それから、それから...洗面台のような大きなお皿になったり、手足が生えた粘土君になったりして、靴に変身した粘土くんもいました。最初に粘土くんと粘土ちゃんを見たときに、「アンタは嫌い」という子もいました。そうだ

ね、5-6人いたと思います。で、帰りの時間になったとき、私はもう一度聞きました。「ね、まだ私のこと嫌い？」すると、嫌いだと言っていた子どもたちはね、どうしていたと思う？まずニンマリと笑って、頭を横に振って、嫌いと言っていた時に挙げていた手を、背中後ろに隠しました。あまりもおかしかったので、私達も笑いました。

粘土くんと粘土ちゃんは今、明德高校の生徒たちとも遊んだあと、白いベッドの中で少し休み、この次はどこに行こうかなと、楽しい夢を見ているようです。

遊び終わってから数日後。保育園からも幼稚園からもお礼状が届きました。そのお礼状に「子どもたちも会いたがっています」と書かれています。ですから、この2人、そのうちまた出掛けていくはずだと思います。そのお話はまたその時。

では、お楽しみに。





11月の予定

- 11/2
オープンキャンパス+公開授業
- 11/6
研修生相互見学会 (第二勝田保育園)
- 11/8、15、22、29
教育実習Ⅰ (1年生)
- 11/10~12
研修生 山形保育研修
- 11/14
保育実践研究会
- 11/16
オープンキャンパス+公開授業
スターボックスお話ライブ
- 11/22
研修生スクーリング
- 11/23
スタートアップカレッジ
- 11/30
オープンキャンパス
公開授業
保育実践研究会



編集後記

今月号は如何だったでしょうか。特集でお伝えした「わくわく体験研修」は、本学が大切にしている「体験から学ぶ」を象徴する授業です。この授業は、2年生の秋に実施されるもので、教員と学生とが一緒に国内外のフィールドへ出かけて現地の生活と文化を体験します。今年度のフィールド先は、隠岐・鹿児島・富山・沖縄・長野・富士山(登山)・東京・カンボジア・スペインでした。今月号では、これらの中から「わくわく体験研修 スペイン」を取り上げました。本文にもあるように、「わくわく体験研修」は学生にとって、「頭の中を良い意味でかき混ぜてくれる」機会になっているようです。研修先で体験した様々なことは、自分の日々の生活とどのように繋がっていくのでしょうか。来月号でも、学生の声を中心に据えた「わくわく体験研修」をお伝えします。読者の皆さん、お楽しみに!

また、特集Ⅱでお伝えしたように、今年度より走り始めた「あそぼうカー」は、支え合う関係にある保育現場と養成校とが、互いにメリットになるような繋がりとなることを目指しています。本取組を通じて、保育者の素敵な仕事がより魅力的になるように、何より、こどものより良い育ちに繋がるようにとの願いを載せて、「あそぼうカー」はこれから様々な保育現場に走って行きます!(鶴田)

発行：千葉明德短期大学

千葉市中央区南生実町1412

Tel:043-265-1613

Fax:043-265-1627

e-mail:

tandai@chibameitoku.ac.jp

URL:[http://](http://www.chibameitoku.ac.jp/tandai.html)

www.chibameitoku.ac.jp/tandai.html

編集

田中 葵

深谷 ベルタ

鶴田 真二

読者の皆様へ、『月歩学歩』に対するご意見、ご感想をメールにてお寄せ下さい。